

【前回の補足】

■最初の言語＝最初の間答

もし最初の言語が、西田定規のいう「安全保障の言語」だとすると、敵意のないことを表現することが必要だ。出会った時の挨拶が、その一つである。「ヤア」「ハイ」などにあたる語を発声したのであろう。挨拶の言葉は、同一性言明ではない。しかしそれはエコイックである。私が「ヤア」と言うと、相手が「ヤア」と返えず。ここに「ヤア」＝「ヤア」が同一性の確認表明になっていることを読み取ることはできる。これが習慣になる時、「ヤア」と声をかけるときには、相手もまた「ヤア」と答えることを期待するようになるだろう。相手もまた、そのように期待されていることを意識するようになるだろう。その期待が相互覚知になるとき、「ヤア」と呼びかけることおは、問いかけの意味を持つだろう。それに対して「ヤア」ということは、その問いかけに対する返答の意味をもつだろう。これが最初の間答かもしれない。

もし敵意のないことの表明として「ヤア」と言うものは、相手からも何らかの応答があることを期待するだろう。もし、それがなければ、相手は敵を持っているのかもしれないとおもうだろう。xが「ヤア」といったとき、敵意がないことを表明するつもりでxが「ヤア」と言った時、その意図が共有知になっているとすれば、もしyがそれに何か答えなければ、「<<yはxに対して敵意を持っているかもしれない>>とxは理解するだろう」といこともまた、共有知になるだろう」そのような共有知が生じてしまうことをさげようとするれば、yもまた「ヤア」などとこたえるであろう。

もし「ヤア」が最初の言語の成立であり、xやyがその他の言語をもたないのだとすると、上記の分析は、もちろん、xやy自身が言葉で考えていることではない。それは、私たちの分析に過ぎない。ただし、そのようなことを感じており、そこから「ヤア」にたいして「ヤア」という挨拶を返すという習慣が成立したという可能性はあるかもしれない。

(以上は、経験的根拠を持たない単なる推測に過ぎません。)

■クワインの「根源的翻訳」の議論の応用可能性

クワインは、野外言語学者が、未知の言語を使用する手段に出会った時に、その言語を理解しようとする作業を「根源的翻訳」と呼んで分析した。野外言語学者は、何度か、現地人が「ガヴァガイ」というのにであったとしよう。その時に、常に現地人がうさぎを見ていたことに気づいた野外言語学者は、うさぎを見た時に「ガヴァガイ？」と訪ねてみる。現地人が「エクイ」といって、同意を示し、別の場合には、「デクイ」と言って不同意を示すことを確認したとしよう。このとき、「ガヴァガイ」は、「うさぎ」と同義であるかもしれない。あるいは「うさぎ性」とか「うさぎがいる」とかの意味かもしれない。クワインは、ここで「野外言語学者は、どうやって、「ガヴァガイ？」が現地人にたいして質問の意味になることを知ることができるのか」「野外言語学者は、現地人による同意と不同意の返答をどうやって判別するのか」などの問いに答える必要がある。しかし、かれはこれらの問いを立てないし、彼の議論の中にその答えを見つけることもできない。

クワインの「根源的翻訳」の分析は、このような問題を持っているが、このような状況は、人類が言語を使用し始める状況もこれと似たものであったかもしれない。

火を使い始めたとき、人間が木に火をつけた時に、たとえば「バルス」と叫び、それが「火がついた」とか「火だ」という意味の言葉になっていくことは考えられる。そのとき、火をつけた時に、いつも「バルス」と叫ぶ人に、ひがついたときに「バルス？」と質問して、相手もまた「バルス」と返したというようなことを繰り返して、「バルス」が火を指すものとして共有されるようになるのかもしれない。対象を指さして発声するということを繰り返すことによって、多くの対象に名前をつけることができるようになるだろう。

火のないところで「バルス」と何度も叫ぶ人がいると、何を言いたいのだろうか、と考えるだろう。そして、この発声の意味を、推論によって、火が欲しいのだと理解するだろう。このときに必要になる推論の能力は、前提や結論が命題であるような、明示的な推論の能力ではない。なぜなら、彼らはまだ前提として使える他の文を知らないからである。

次に「ガヴァガイ。バルス」という発話を聞くときには、それを、うさぎの肉を火で焼きたいのだと理解することができるかもしれない。ここにも推論があるが、それもまた明示的な推論ではない。

このようにして、二語文が共有されるようになるかもしれない。このようなプロセスを経て私たちの言語が発達してきたのだとすると、ここで働いている推論を分析する必要があるだろう。

(何度も言いますが、以上はいまのところ単なる推測です。このような推測は、認知科学や脳科学など別の議論と結びつけることによって、修正ないし展開してゆくことができるだろうと思います。)

§ 4 同一性言明の意味について

1 同一性条件意味論の説明

次の主張を「同一性条件意味論」と呼ぶことにしたい。

「 $A=B$ 」(の意味)を理解するとは、「A」と「B」の同一性条件を理解することである。
言い換えると、同一性言明の意味は、その同一性条件である。

この主張を理解するには、まず「同一性条件」を説明する必要がある。同一性条件を説明するには、同一性／非同一性が成り立つ仕方を分析する必要がある。

同一性言明の同一性／非同一性が成り立つ場合は、次の2つに区別できる

- (1) 「A」の指示対象と「B」の指示対象が同一／非同一である
 - (a) 意味だけからそれがわかる場合 「彼の父の妻=彼の母」／「彼の父の妻≠彼の父の父」
 - (b) 意味と事実によってそれがわかる場合 「クサンチッペ=ソクラテスの妻」／「クサンチッペ≠プラトンの妻」
- (2) 「A」の指示対象と「B」の指示対象が存在しない場合。
この場合には、同一性／非同一性は、意味だけに基づく。
「ユニコーン=角を持つ馬」／「ユニコーン≠翼をもつ馬」
「ジュリエット=ロミオの恋人」／「ジュリエット≠ロミオの母親」

<ミニレポート課題 これらの例を一つずつ挙げて下さい。>

まず(1)の場合をより詳しく分析しよう。

問い1 「私たちは、(1)「A」の指示対象と「B」の指示対象が同一である場合を、次の2つに分けた。

- (a) 意味だけからそれがわかる場合
- (b) 意味と事実によってそれがわかる場合

しかし、この二つが明確に分けられないということが、クワインの主張であった。

クワインのその議論は、同一性言明の場合にも妥当するのだろうか？」

■クワインの「経験主義と二つのドグマ」の議論

クワインは、この論文で、分析的真理と総合的真理の区別ができないことを論証する。

分析的言明を次の2つにわけろ。

- 論理的に真なる言明「結婚していない男は、結婚していない」
同義性による真なる言明「独身者は、結婚していない」

まず彼は

1 「同義性」によって分析性を定義しようとする。

そこで「同義性」を定義しようとする。

- (a) 定義によって
- (b) 交換可能性によって

「認知的同義性」は、「真理値を変えることなき交換可能性」で説明できる様におもわれる。しかしそこには限界がある。つまり外延的言語においては、「心像をもつ動物」と「腎臓をもつ動物」の交換可能性と「独身男」と「結婚していない男」の交換可能性の区別がつかない。

2 「意味論的規則」によって、分析性を定義しようとする。

「日常言語において分析的言明を総合的言明から区別することがむずかしいのは、日常言語が曖昧であることからくるのであって、明示的な意味論的規則を備えた精確な人工言語ではこの区別は明確である」としばしば言

われる。しかし、ここには混乱があることを、私は以下で示そう。」

「ようするに、「言明Sが言語L0において分析的であるのは、・・・」という仕方ではじまる規則を我々が理解できるためには、我々は、それ以前に、一般的関係名辞「において分析的」を理解しているのではなくてはならないのである。」

3 「検証理論」によって、分析性を定義しようとする。(この節、未発表論文からの引用)

この論文の第5節では、検証理論による区別、つまり、分析的言明である「いかなる場合でも確証される」¹言明と総合的言明である「確証されない場合がある言明」の区別ができないことを論証する。

「還元主義」つまり「それぞれの言明が、その仲間の諸言明から切り離してとらえられとき、とにかく検証ないしは反証が可能である」²は成立しない。なぜなら、「確証の全体論」つまり「外的世界についてのわれわれの言明は、個々独立にではなく、一つの団体 (a corporate body) として、感覚的経験の裁きに直面するのである。」

³ が成立するからである。この確証の全体論のために、検証理論による分析と総合の区別は不可能なのである。彼の意味の全体論の証明は、つぎのようにまとめられる。

検証主義意味論+ (a/s 区別の否定*) 確証の全体論 →意味の全体論

意味の全体論を明確に主張している有名な箇所を引用しよう。

「記号を使用において定義するという考えは、先にも述べたように、ロックやヒュームの名辞ごとの経験主義という不可能な立場に対する進歩であった。ベンサムとともに、名辞ではなく言明が、経験主義的吟味を受けるべき単位として認められることになった。しかし、私が今強く主張していることは、言明を単位とする場合でもあってもなお、われわれは格子を細かくし過ぎているということである。経験的有意性の単位は、科学の全体なのである」⁴ (下線、引用者)

クワインが確証の全体論および意味の全体論を主張するときの決定的な理由は、言語的要因と事実的要因を区別できないということ(解離不可能性テーゼ(inextricability theses))である。

「言明の真理性は、何らかの仕方で、言語的要因と事実的要因へと分析できる」と考えるのが経験主義である。「我々が経験主義者であれば、事実的要因は確証的経験の範囲ということに帰着する。言語的要因がすべてであるような極端な場合においては、真である言明は分析的である。[...]私のここでの提案は、個々の言明の真理性における言語的要因と事実的要因について語ることは、それ自体ナンセンスであり、他の多くのナンセンスの源でもあるということである」⁵

これは、<言明と事実を分けて、その一致によって真理を定義する>ことができないことを意味している。それゆえに、私たちは、言語の全体に関して、採否を決定しなければならないのである。一部の語や一部の文の意味を他の部分から独立に変更することは、「解離不可能性テーゼ」(あるいは Davidson の「意味と信念の相互依存性」)を受け入れる限り、困難である。意味の全体論の抱えている問題は、それを単純に緩く解釈すれば、解決できるという問題ではなく、意味論にとっての原理的な問題である。

■クワインの議論からの帰結

意味によってのみ成立する同一性と意味と事実によって成立する同一性の区別ができない。

<単独の同一性言明について、その意味を理解することはできず、理論の全体のみが意味を持つ>ということになりそうだ。

¹ W. V. O. Quine, 'Two Dogmas of Empiricism' in *From a Logical Point of View*, 1953, p. 37. クワイン「経験主義の二つのドグマ」『論理的観点から』飯田隆訳、岩波書店、p. 56。

² *Ibid.* p. 41 前掲訳 p. 61。

³ *Ibid.* 前掲訳、同所

⁴ *Ibid.* p.42 前掲訳、pp. 62-63

⁵ *Ibid.* p.41 前掲訳、p.62。

